慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	会場からのコメント
Sub Title	Comment from the floor
Author	白井, 厚(Shirai, Atsushi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2011
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.80, No.2・3 (2011. 6) ,p.112(210)- 116(214)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム : キャンパスのなかの戦争遺跡 : 研究・教育資源としての日吉台地下壕
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20110600-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

会場からのコメント

白井　厚

それではご要望でありますので、少しお話を致します。

今日のシンポジウム、大変面白く拝見、拝聴いたしました。二〇〇八年に慶應義塾では創立から一五〇年目ということでいろいろ記念行事があったのですが、記念するというのは、記して（一五〇年の歴史を正確に記述して）念ずる（考える、研究する、そこから学ぶ）ことでしょう。そしてしっかり将来の方向を見定めるということが一五〇年の記念だったと思うんですけれども、今までの慶應義塾の動きを見るとその前の部分がすっぽりと抜けておりまして、いたずらに未来志向ですね。未来への先導、未来貢献、Design the Future などと上っ調子の言葉と計画ばかりで、建物は建ちますけれども、過ぎ去った歴史を学ぶ、「温故知新」、過去を研究し反省するという作業を怠っていたのではないかと思っておりました。創立百年の時には、当時としてはかなり水準が高い『慶應義塾百年史』が作られて後続の東大、早稲田などの百年史の参考にもなったと思いますが、一五〇年史は書かれず、『慶應義塾史事典』が編纂されただけです。いずれ『福沢諭吉事典』その他が続々刊行されると楽しみにしていますが、更に言えば、慶應義塾の文学部には史学専攻の優秀な研究者が沢山いるのに、例えば日本史・アジア史上最大の惨禍をもたらした戦争についてはあまり研究がない。歴史家は一体何をしておるのか、ということも思っておりました。けれども、今日この三田史学会のシンポジウムをいろいろ聞いてみまして、やっぱりやっとるんだなぁ、と改めて感じております。この調子ならば、一五〇周年を記念する意味があるのでは、ということであります。

それでいろいろ言いたいことはたくさんあるのですけれども、日吉台地下壕の研究ということに焦点が当てられていましたので、それについて私見をお話します。先ず戦争遺跡というものについて、これは十菱さんの「報告三」にあったように、敗戦後六十三年たった現在戦争体験者も資料も激減しつつありますから、遺跡の重要性は相対的に非常に大きくなっている。遺跡は見るものにおのずからメッセージを発しますし、歴史の冷静な、科学的な証拠物件であるだけでなく、しばしば感動、大きな衝撃を与えます。関係者が見る場合はもちろんですが、無関係なものが見ても想像力が膨らむ。その背後にある人物や事件を少しでも知っていれば、その知識はどんどん成長し、戦争の実態に迫ることが出来るのです。しかし戦争遺跡はよほどうまく保存しないと劣化が進みますし、また観光や都市開発、ビルの建築などで消滅しつつあります。日吉の地下壕を含めて文化庁の『調査報告書』の発行などが非常に遅れて心配していたのですが、今日は三田史学会が大きくとりあげてくれたので、このシンポジウムを「慶應義塾の調査報告書」のように伺い、大変心強い。戦争遺跡といってもおのずから大小、軽重の差がありますが、世界遺産の広島と長崎、地上戦の戦場ともなった沖縄の遺跡群が国内では横綱格とすれば、松代大本営と日吉台地下壕はそれに次ぐ大関といってよいでしょう。松代には天皇の御座所がありますから海軍総隊の総司令長官兼連合艦隊司令長官よりは格が上かもしれませんが、松代が大本営として使われなかったのに対し、日吉の地下壕は、寄宿舎や校舎などの地上の建築物を含めて、レイテ沖海戦、特攻攻撃、沖縄海戦、戦艦大和の出撃など、海軍中枢の司令部として激戦地に命令を出し続けたので、東の大関ということになりましょう。

もう一つ重要なのは、これは大学のキャンパス内の戦争遺跡（今は当時の大学予科の校舎を高等学校として使用）だという事です。全国に広がっていた軍の施設には、戦後大学が入り戦争遺跡と同居するような例は他にもいくつかありますが、慶應義塾は戦時中にキャンパスの一部を海軍に貸し、学生がいるうちに軍は校舎や寄宿舎を使い巨大な地下壕を構築しこれを使用、しかもそのためか敗戦後はアメリカ軍に四年間もキャンパス全体が接収されます。つまりこの戦争遺跡は、大学と海軍の中枢が物理的にも接触、同居し、しかも日本軍とアメリカ軍の双方に土地や施設の使用を許さなければならなかった、という悲劇の舞台だったのです。東大は陸軍への施設の

貸与を断っていますが、慶大はどのようないきさつで海軍に貸したのか、当時の教職員や学生はどのように考えていたのか、周辺の住民はどうか、そのあたりも知りたいところですね。

このような重要な戦争遺跡を、それでは誰が今まで護り活用してきたのか。新井さんが「報告二」として詳しく説明されたように、それは「日吉台地下壕保存の会」なのです。これは、地下壕に関心を持った教師や学生が、この遺跡を保存して調べよう、この保存の意義を訴えようと日吉の住民たちと取り組んできたもので、いわば任意の支援団体で、学生会員は今いなくなりましたね。ほとんど市民のボランティア活動です。しかしその活動は大変なもので、一九八九年発足以来二一年間、塾の許可を得て希望者を地下壕に連れて行って内部を安全に案内し、会報を発行し本も作り、かつて壕にいた旧軍人や周辺の住民から聞き取り調査をしたり、塾内外の専門家の協力を得ながら後継者のためにガイド養成講座を開いたり、近辺の蟹ヶ谷にある海軍東京通信隊跡や陸軍の登戸研究所跡などの保存運動と協力して毎年「平和のための戦争展」を開催、十菱さんが代表となっている戦争遺跡保存全国ネットワークを支える中核団体であり、塾に対

しては平和ミュージアム建設の提案までしています。二〇〇五年には神奈川新聞社から神奈川地域社会事業賞も受賞しました（注）。

慶應義塾はこの遺跡のために何をやってきたか。あれだけの歴史的な遺産を抱えていて、その上にあぐらをかいてボランティアの人たちにまかせっぱなし、というだけではけしからんと思っていたのですけれども、二〇〇一年に蝮谷側の壕の出入り口を開けて入りやすくし、地下壕内の通路をすっかり補修いたしましてね、昔は長靴を履かなければ入れなかったところですけれども、今はふだんの靴でも見学が出来るくらいになりましたし、内部の照明もつけました。先ほど安藤さんが「報告一」で詳しく説明されたように蝮谷側に新しい地下壕の口が見つかった。さて慶應義塾はどうするかとみていたら、これは他の大学も感心するほど、これを保存することに熱意を見せたようであります。そうなると、今後はこの地下壕の管理・保存について、塾はもっと長期的なヴィジョンで積極的に取り組むと期待することが出来るでしょう。

今日ここで私が更に言いたいことは、学生の問題なのです。このシンポジウムのサブタイトルが「研究・教育

資源としての地下壕」となっているのは面白いですね。教育資源、これまであまり聞かなかった表現です。地下壕はもちろん日吉にある。その上に今は高等学校がある。そのそばでは、大学の一・二年生が大勢学んでいる。理工学部の矢上台も近い。スポーツの施設や合宿所も多い。協生館には三つも大学院があるし、線路の向こう側には普通部もある。そういうところにいる学生は、ちょっと歩けば来られるこの大関級戦争遺跡を見学したことがあるのでしょうか。戦争遺跡があることすら知らなくて、新聞やテレビで紹介されると驚くのではないか。そんな学生は、自国の近現代史を何も知らないかもしれない。教師は彼らに関心を持たせるためにどれだけ努力をしているのか。ひょっとすると、教師もこの地下壕について何も知らないのではないか、という疑問を感じます。

地下壕保存の会は、毎年川崎か横浜で「平和のための戦争展」というのをやっていて、かなり遠いところからもいろいろな方が見に来ます。慶大の来往舎の展示場を借りることも多い。その時講演会やシンポジウムも催します。けれども、キャンパスの中で展示会をやっている時でさえ、宣伝しても慶應の学生はほとんど姿を見せない。このような実態はなぜか。若い人たちが、戦争の歴史、その持っている問題性、今日に及ぼす影響、それから将来に投げかける示唆等々について、無知と申しますか無関心になっている。広くアジアを見るならば、あの戦争について殆どの日本人が無知だということが、日本がアジア諸国となかなか友好関係を結べないで孤立してしまう大きな理由の一つではないか。他の学校にはないこれほどの「研究・教育資源」を持っているのですから、せめて慶應では、宝の持ち腐れになることがないようにこの教育資源を活かしてそれが講義の中にも反映する、と言うようにならなければはあまりにも勿体ないと思うのです。

ですから、慶應の教員、特に史学専攻の教員の方々は、本日のシンポジウムを契機として、慶應義塾はアジア太平洋戦争を学ぶためには絶好のキャンパスを持っているのだということを学生に教えていただきたい。特に史学専攻を希望する学生に対しては、関連する講義の中で必ず地下壕を見学しレポートを書くよう指導していただくといいですね。新井さんが報告されたように、小学生だって面白い感想や質問を書いてくるのです。この見学を三田に進級するための必修とすれば、遺跡を学ぶことの興味も、戦争と平和の問題も早くから感じ取り、その中

から若手の研究者も生まれるでしょう。都倉さんが「アジア太平洋戦争と慶應義塾」という題でコメントされたように、塾でこの時期についての研究は停滞し手薄です。また福澤以後の大学史研究は極めて手薄です。時折書かれる本なども、誤りが多い。今日の会は満員の盛況ですが、やはり若い人が少ないように思います。是非、日吉で学んだ大勢の学生の中から、いや全国から日吉台地下壕を見学に来る大勢の若者の中からも、都倉さんみたいな若くて優秀な学者がたくさん生まれることを期待いたしまして、私のコメントとさせていただきます。どうもありがとうございました。

（注）その後二〇一一年三月一八日には、「平成二二年度かながわボランタリー活動奨励賞」の受賞団体に選ばれ、松沢神奈川県知事から賞状と副賞を授与された。